

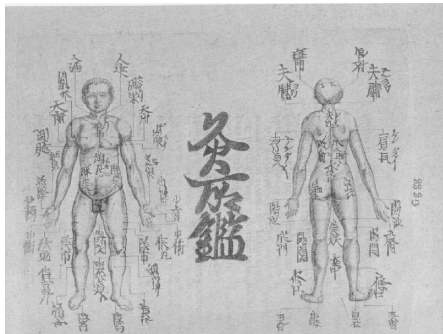
# 江戸期における鍼灸の教育と伝承

鈴鹿医療科学大学

東郷俊宏

- 『日本盲人社会史研究』(加藤康昭、未来社)
- 『鍼灸按摩史論考』(長尾榮一教授退官記念論文集)
- 『日本医学史』(富士川游)

- 医学史と医療社会史
- 人物史中心の史料(『皇国名医伝』『本朝医考』)
- 書誌学的な研究が中心
- 制度史、社会史的な観点の欠如
- 疾病史をどう記述するか？
- 多様な施術の形態？
  - (灸すえ所、鍼立たちの営業形態、寺社における施灸)



## ケンペルによる日本の伝統医学紹介

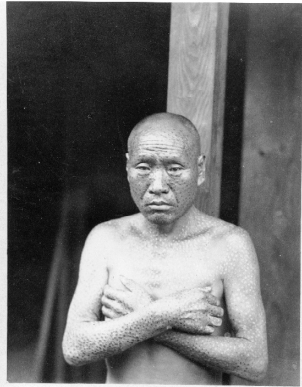
灸:

- この方法で行う灸は少しも恐ろしいという感じを与えない。艾灸の場合は、どこにも灼熱した物はどこにも目に映らないし、艾が焦って燃える芳香が匂ってくる。
- 灸立ては、艾を円錐状に皮膚の上を立て、これに点火する。最初の灸立てを皮切りといい、次からは同じ箇所に戻り灸を立てる
- 我慢強い日本人はよくこの皮切りに耐える。日本では子供も大人も、男も女も誰でも灸を立てる
- 人々は病気に罹らぬよう、また罹ったらこれを治すために艾灸を行う。

- 灸の秘訣は、病状ごとに異なる灸所について明確な知識をもつ、ということである。
- 我々ヨーロッパ流の考え方では、(中略)患部に最も近いところということになりそうなものだが、日本の灸師は、しばしば患部から全然離れた箇所を経穴として選ぶ。
- しかし、胃の調子が悪く、食欲を付けようとする場合に、両肩に灸をすえると、たしかに効く。

## ケンペルによる日本の伝統医学紹介

- 鍼
  - 日本の職人は、金または銀から人体を刺すのにきわめて都合の良い精巧な鍼を作っているのである。
  - 身体の中のどの箇所にも鍼を立て、打たねばならぬか、特定部位に関する知識は、日本の外科医術の一大分野をなしているほどである。
  - その道の大家を点刺という。(中略)この経穴に鍼を打つ人は鍼立てと呼ばれている。



ベルツが撮影した  
ハンセン病患者  
(草津)

*Lepra-Infektion im Kindesalter  
bei einem 12-jährigen Knaben -  
Symptome: von 1876  
in der Umgebung von 1876-77 in einem Hause in Hannover.*

## 杉山流鍼灸講習所

- 天和元年徳川綱吉の將軍の職に就くや、直ちに令して鍼術の振興を図らしむ。杉山和一すなわち命を奉じて起ってその事に任じ、鍼灸講習の所を設け、以て諸生を教授し、門人三島安一に至りてさらにその業を拡張し、講堂を千住、板橋、新宿、品川、その他諸州四十五箇所に増設し、鍼術を業とするもの殆どその門に出づ

富士川游『日本医学史』

- 『日本医学史』の記述は浅田宗伯『皇国名医伝』に依拠していると考えられるが、幕府の法令には、鍼術の振興に関するものは確認されていないが、講習所の設立に関して綱吉の支持が大きく作用していた事は事実と考えられる。

- 杉山検校の幕府からの拝領地
  - 1685(貞享2) 116坪(道三河岸)
  - 1689(元禄2) 530坪(鷹匠町)
  - 1693(元禄6) 1890坪(本所一ツ目)
- 講習所の成立年代は明確でない。元禄初年か？

- 教科書:杉山流三部書
  - 『療治ノ大概集』『選鍼三要集』『医学節要集』
- 『選鍼三要集』
  - 「門人、初学のためにこれを発す」(自序)
  - 「此の書は不学の者に教え、且つ盲人をして諳んぜしめんがためなり」

- 「三日松平美濃守吉保が邸に臨篤あり、(中略)御講書など例の如し、けふ恩寵に浴する家臣十人論語、書経を進講す。瞽者一人医書を講じて時服たまふ」(『常憲院殿御実記』元禄十四(1701)年十二月三日条)
- 杉山和一の弟子、杉枝検校による將軍綱吉への進講
- 定型化した医学テキストによる教育の確立？

## 家元制度式の免許制度

- 免許は一回免許制。伝授内容の他伝に関しては禁止。
- 免許の相伝権は学校が独占。免許取得後も江戸府内での指南は許されていない。他国での指南についても学頭の指示を要する。
- 目録巻の伝授にいたって江戸府内での指南の許可

## 武蔵野検校勝虎 就学履歴 (1818-87)

- 1831 鍼治学校へ入門
- 1834 杉山流鍼学皆伝の免許状
- 1845 杉山真伝流表の巻伝授
- 1848 杉山真伝流目録の巻物一巻伝授
- 1852 検校へ
- 1863 杉山真伝流秘伝一巻の伝授

## 米山検校による鍼道学校設立案(1754)

- 高田藩(新潟)に盲人師弟募集願書の提出
  - 目的:二十歳以上の貧窮している盲人への職業教育の機会提供
  - 場所:江戸中橋上楨町
  - 修業年限:5年(修業中の生活扶助)
  - 師弟の募集は各国から行い、習得後は国許へ返す(鍼治学校との競合を避ける?)
  - 結果的には京都在住の検校方から反対を受け、計画自体が頓挫する。

- 藩校教育と医学 1641武断政治から文治政治へ
- 岡山
- 全国的に藩校が作られるのは宝暦年間以降
- 255校(ほぼ全国)
- 金沢医学館
- 熊本藩:再春館:熊本大学医学部へ(北里柴三郎)
- 薩摩藩:「明時館」(天文館)安永8年(1779年)
- 島津重豪
- 侍医の曾榮(占春)の『仰望節録』には、「公、今茲に御齡八十有九にして、強記或いは壯年の人に勝れり。詩歌及び諸公よりの消息文を読みたまうに眼鏡を用いたまう事なし。これ五体健全のしるし顯したまう。」と重豪の壮健ぶりを記録している。

## 藩校の設立 (その多くは18世紀後半以降)

- 造士館(鹿児島) 1773(安永2)
- 再春館(熊本) 1757(宝暦7)
- 采真館(福岡)
- 明倫館(萩) 1718(享保3)
- 日新館(会津) 1804(文化元年)
  
- 昌平坂学問所 1797

## 私塾では

- 学館医学院(京都):畑黄山(1782~88)
  
- 教課
  - 醫經・經方・児科・女科・瘍醫・鍼灸・本草
  - 鍼灸のテキスト
    - 銅人鍼灸図経・明堂鍼灸図経・資生經・鍼灸聚英・十四經發揮
  - 「別に經・史・子・集四部の中から切要なるものを採りて之を講習せしめ、毎歲その篤学、勤行、詩文、診候、薬案の五科目に就いて試問を行ひ、甲科を得るものはその席を進め、または之に成業の證を與へたり」

## 江戸医学館の成立

- 躋壽館（多紀元孝創立 1765 明和2）
  - 神田 佐久間町
  - 考証学派の輩出
    - 多紀家I(元孝・元簡・元胤・元堅)
    - 森立之
    - 渋江抽斎
    - 伊沢蘭軒

- 教課
  - 本草經經・素問・靈樞・難經・傷寒論・金匱要略
  - 經絡・鍼灸・診法・藥物・醫案・疑問
- 「醫案、疑問は文辞に預かり、その他は皆、事に就て之を伝え、診法には諸生をして鄙賤の治を乞うものを診し、教導して習熟せしむ」

- 「天明四年より百日教育の学を始む。その法格は毎歳二月十五日より、百日の間、有志の生徒をして学舎に入りて研学せしめ、また外来の生徒も日々講義を聴くことを得せしむ。」
- 「その教説は前例に仍り、六部の書にして元簡は素問を講じ、目黒道啄は難經を(中略)小坂元祐、岡田道民は經絡を講じ、儒家井上金峨、吉田篁墩等も亦經書をここに講ぜり」

(富士川游『日本医学史』)